〔書　評〕

佐佐木隆著

『萬葉集と上代語』
『上代語の表現と構文』

浅　見　　徹

著者は『上代語の表現と構文』の「はしがき」で，「文献上の事実は徹底して尊重されなければならない。……文献にあらわれた現象の方を尊重し，それに照応するかたちで当面の歌にかかわる問題を処理するという姿勢はあくまでも堅持すべきであるとおもわれる」と述べる。当然の事ながら，正当な主張である。宣長以来と言うべきか，契沖以来と言うべきか，上代文献の解読に当たってきた人々の基本的態度は，本来この線に従って来ていた筈である。ただ，著者をしてかく言わしめる傾向が，世に無いではない。そこには，この時代の文献に対する訓みの不徹底な面も確かにあるだろうし，また，それぞれの論者なりの，この時代，あるいはこれらの作品に対する，全般的な認識に基づいた態度の顕現である面もあろう。ともあれ，万葉集なら万葉集の歌の解釈・受容に関して，それが我々の手に残されている「万葉集」という文献に基づくものである以上，その文献にあらわれた現象が尊重されねばならぬのは自明の理と言ってもよい。著者はこの基本的態度のもとに上代の語法・訓詁・解釈などの諸問題を展開する。この両著で採り上げられた内容を窺うためには，まずは両著の目次を挙げてみねばなるまい。

『萬葉集と上代語』（便宜ここでは前著と呼ぶ）

Ⅰ部　上代語の表現とその構文
　一章　連用形中止法の機能と時制
　二章　連用形と否定表現との呼応
　三章　連用修飾・被修飾の一側面
　四章　［已然形＋や］をふくむ構文
　五章　［――ずは――。］の構文
　六章　助詞「や」をふくむ構文
　七章　助詞「を」をふくむ構文
　八章　助詞「と」をふくむ構文
　九章　反復表現をふくむ構文
　十章　ク語法をふくむ構文
Ⅱ部　上代語の構文と和歌の解釈

一章　籠もよみ籠持ち
二章　朝踏ますらむその草深野
三章　吾が背子は仮廬作らす草無くは
四章　常にもがもな常処女にて
五章　未だ咲かなくいと若みかも
六章　鵜にしも有れや家念はざらむ
七章　海人にあらましを玉藻苅りつつ
八章　海人とや見らむ旅行く吾を
付章一　めろよしによし寄り来ね
付章二　海の浜藻の寄る時々を
付章三　さ一夜も率寝てむ時や家に下さむ

III部　上代語の構文と和歌の訓義
一章　玉匣覆乎安美
二章　湍者不成而淵有毛
三章　吾念者惑毛安流香
四章　消跡可曰毛恋乃繁鶏鳩
五章　目之乏流君今夜来座有
六章　細砂裳吾者生鹿
付章一　雲根火雄男志等
付章二　東野炎立所見而

『上代語の表現と構文』（ここでは後著と呼ぶ）
第Ⅰ部　歌の表現と構文
第一章　大和の国は押しなべて
第二章　み山も清にさやげども
第三章　悔いにはありと言へ
第四章　吾が恋は千引の石を
第五章　偽りも似つきてそする
第六章　槻弓の臥やる臥やりも
第七章　千歳を待ちて澄める川かも
第II部　歌の構文と表記
第一章　我許背歯告目
第二章　反見為者月西渡
第三章　朝霜之消者消言尓
第四章　直相者相不勝

第五章　山寸隔而不遠国
第六章　惑情不堪念
第七章　著丹穂哉人可知
第八章　引豆良比有雙雖為
第III部　『古事記』の表現と構文
第一章　伊都之男建蹈建而
第二章　為穢汚而奉進乃
付章　「天石門別神」の素性と機能

内容は，かく多彩で多くの問題点に及ぶ。それぞれの一節一節に，表題となった歌，あるいは語句に対しての解釈（後著第Ⅰ部・前著II部），訓読（後著第II部・前著III部），構文（後著第III部・前著Ⅰ部）などの問題が盛り込まれている。当然，多くの用例を駆使し，旧説の問題点を指摘し，新しい解釈を提示している。ここに提示された箇所は，決して目新しいものではない。古来多くの解釈が対立して未だに決着をみていない類が多い。読者にしてみれば，ここではどのような説が，何を論拠として主張され，それぞれがどのような反駁を重ねているかについて，即座にある程度の経緯を思い起こすことができるだろう。このような問題に安易に立ち向かえば，いずれかの説に応援演説をぶつのが関の山，という結果に陥ってしまう。かかる難問に果敢に正面し，しかもかくも多くの諸問題を精力的に取り扱われた著者の態度に深い畏敬の念を覚える。これは普段，著者が先に自ら述べられたような態度で，常に真摯にこれらの文献に向かい合って居られることの結果であろう。著者の態度は一貫している。

著者の問題意識の向かい方に見当が付けば，これら端的な表題から，ここで何が論じられているか，結論はどの方向に向かおうとしているか，などについて，ある程度の予測は付けられるであろう。限られた紙面では，ここに採り上げられた論点について，これを詳細に紹介すること，真っ向からあげつらうこと，いやコメントを付加することすら，到底余裕はない。評者の興味のままに摘み食いをするのも一つのテだが，上代文献の訓詁・解釈に興味のある方には，是非ご一読あらんことを切望して，今回は両書各部の第一章のみを対象として，いささか読後感を述べてみることにしよう。

さりながら，後著第Ⅰ部第一章「大和の国は押しなべて」は，旧著『上代語の構文と表記』，前著II部一章，後著第II部第一章でも取り扱われている，万葉集巻頭歌が対象となっている。旧著に主体が置かれる論は参考程度でよろしくても，両書が説くところは関連させて触れねばならないだろうから，最初にこれを一括して眺めてみることとする。

まず「籠もよ」の「も」が並立か感動か，の問題が改めて論じられる。これは前著に詳しく載せ，「もよ」「もや」の全用例を引く。その一三例は記紀歌謡，東国歌の場合が

ほとんどであること，文末に置かれることが多く，名詞に直結する例が少ないこと，「は」に下接する例があること，など多様である。いわば，用例調査の限界がここにあるとも言えよう。残された上代文献は用例収集のために集められたデータではない。偶然に我々の手に残された，歌という特殊な文芸作品の表記に用いられた結果としてのものである。ここに集まった用例を，すべて同じまな板の上に載せて良いかは十分に考えねばならぬことであろう。

「籠もよ」が並立とは見られないことは著者の言う通りである。もし並立の意を強調するならば，「み籠も持ち」の箇所に「も」が現れる筈であろう。だが，並立か感動かは，助詞の意味機能として対立する概念であろうか。同じ形態の助詞を，異なる意味・機能を認識し分けて使い分けるという言語だったのであろうか。もともと並立とは，語もしくは句に関して，類似しながらやや異なる，同質のものを列挙する場合に使われるもので，やや古めかしい言い方をすれば詞的・概念的表現に近いものであり，感動とは話者自身または対者目当ての，それこそ陳述そのものである。それらはむしろ文構造(述語との関わり方) の中で顕現する意味として見た方がよいのではなかろうか。

次の問題は，「我こそは告らめ」か「我にこそは告らめ」かに関わる(後著第II部第一章)。著者の見解は，ニの訓み添えに関することと，意思を表すコソ……メと，慫慂・勧誘の意のコソハ……メは異なるものだという点に中心が置かれる。むろんこの観点を立証すべく，集中の用例が列挙される。然し，ニが表記されていない例がある，というのだけでは不十分で，集中ニの表記される例がどの程度，表記されぬ例は，集中の何処に(巻・作者・時代等) どのような状況で (その歌の表記全体の姿，前後の語句との関係，位置等) という分析がなされなければなるまい。現実に，長年論争の対象になってきたような，つまり，誤解を生みやすいような，「我」が「告る」の主語であるか対象であるかが分かれるような箇所で，コソの方は表記されている，その前の位置にニが無表記でよいかどうかは更に検討の余地があるだろう。

コソ(ハ)……メの形が意思を表すか，それとも勧誘かというのが，係助詞ハの有無によるという発想には与しがたい。それは，その文が誰に向けられたものか(動作主体が誰であるか)で定まる，文の表現分野に属することであろう。すなわち，動作主体を自らとし，主観的に表現すれば主体の意志の意が強く現れ，たとえ主語が話者自身であっても，そして話者以外のことについても客観的に表現すれば推量となり，対者あるいは他者に積極的に向けられれば勧誘となる。それは助動詞「む」の問題でもなければ，係助詞「は」の問題でもない。

むしろ問題は，万葉集巻頭に記載されたこの歌をどのようなものと理解するかであろう。まさか著者も雄略と後の世に呼ばれる大王が，たった一人で郊外へ散歩にでも出掛けて，そこで偶然に見かけたうら若い乙女が，これも一人で若菜を摘んでいるのを見かけて心を動かされ求婚した折りのものだなどとは考えて居られないだろう。となれば，

歌の構成・内容・表現について，この歌の伝承と受容の関係から，もっと異なる解釈が生じるのではなかろうか。例えば，後著第Ⅰ部第一章の「おわりに」で纏められているような

> このように，自分が天皇であることを少女に告知しなければならないという作者がおかれた状況と，その告知をうけた少女の心情に対する作者の配慮，これらの作用と反作用の結果うまれたのが，「大和の国は…吾こそ座れ」という六句の表現だとみることができる。

という解釈（先行する注釈書も大同小異のものが多いが）を拝見すると，はなはだ失礼な言い方をも憚らず極言するならば，何か少女小説の解説ででもあるかのごとき錯覚を覚える。もちろん，この歌が，歌垣で唱和されたものを原姿とするだろうといって，その古い姿で解釈せねばならぬというのではない。

巻頭第一を飾るものとして，古代の天皇としての象徴的存在であった（と推定される）雄略という名を冠して，万葉集に記載された歌である。だから，万葉集の中で，これを記載し，訓み，享受した人々，いわゆる「万葉人」にとって，この歌はどのようなものであったか，ということである。ここに記載された経緯がいかなるものであったか，むろん詳細は不明であるが，少なくとも，なんらかの唱え，語り，節，あるいは動作を伴って人々の前で披露され，伝承されてきた，文字記載以前の姿を残すものであろう。すなわち，歌い手「吾」と聞き手「菜摘ます児」だけが此の場面に存在するのではなく，多くの第三者的聴衆が同じ場に居合わせるのである。そこに思いを致すとき，この歌の受け止め方もかなり異なってくるのではないだろうか。この歌の後半（もしくは第三部）は，それら聴衆（あるいは観覧者）向けの名乗り，中世の謡曲や狂言ならば冒頭に設置されるような，そういう機能を果たしているものと見ることも出来よう。

前著Ⅰ部一章は「連用形中止法の機能と時制」と題される。ここで取り扱われる主な問題は，連用中止法では時制が決定されることはなく，その後に来る語とともに示される「時」と一致するのが原則である。ただし，連用形が「て」に続く場合は，その連用形は過去の事態を表現して，後の「時」とは一致しないことがある，というものである。むろん，多くの実例が丁寧な解釈とともに示されている。その説くところはおおむね説得力が強いと思われる。ただし，接続助詞「て」が付く場合には過去の表現になることがある，というのに対して，これが完了の助動詞「つ」に由来するものだからという解では，「て」が付く場合にすべて過去表現になるのならともかく，その多くが時の表現に関わらないというのであれば，説明にはならないだろう。文の中途において時制が転換する理由は，他の構文的事情によって説明されねばなるまい。もともと，連用形による中止法は，そこで途切れる叙述を後の叙述に続ける（すなわち叙述が完了していない），ということを表現するためだけのものであった。その二つ（もしくはそれ以上）の叙述が，

意味的にどのような関係にあるかは，聞き手の受け取り方に任されていた。動詞の活用形の働きが衰えてくるに従って，前からの叙述を取り纏めるという働きと，そこで纏められた叙述を次に展開するという働きの，その後者を別の語形（接続助詞）に委ねる傾向が強くなってくる。「て」もそこに投入される助詞であって，本質的に裸の連用中止法と差異はない。ただ，「て」を添えたくなるような複雑な文脈の展開，または文脈の折れ曲がりが，時の不一致をも招くものであろう。

しかしここでも気になるのは，ラテン文法で言うところのテンスなる概念がまったく構造を異にする日本語（あるいは中国語）にも当てはまるか，という問題である。例えば「む」という助動詞が表現しようとするのは，現在における話者の推量・意志で，この「む」に上接する動詞がその時点にあって未実現だから，といってそれが「未来」というテンスとして表現されているとは言えまい。動詞終止形は，現在という「時」を表すために使われるのでもない。現代語でしばしば過去といわれる「た」でも，「次に逢った時に」など未来時に関する表現にも用いる。そして，動作概念というものは，時間の経過と共に状態の変化することを表現するものだから，なんらかの意味で「時」に関係を有する。しかし，状態表現は時間と関わらない。形容詞にはもともと助動詞が付かないというのも，形容詞が時間と無縁の表現だからである。形容詞について「時」の表現と関わりを持つかのような記述は避けるべきであろう。

前著II部一章は既に触れた。III部一章は「玉匣覆乎安美」と題する短い論である。ここではいわゆるミ語法の，「ヲ…ミ」の場合，ヲに上接する形はク語法か，連用形転成の名詞に限られる。従って表題の語句は「玉匣おほひを安み」と訓むべきである，というもの。従うべき訓詁であろう。

後著の第III部の第一章に移ろう。ここでは古事記の「伊都之男建蹈建而」が問題にされる。まずは先の「建」の訓注タケブを，「建」という文字ないし語に辞書的に付されたものではなく，文訓読のあり方として捉える近年の傾向に賛意を表し，なおかつ，小松英雄・山口佳紀・西条勉各氏の訓みに疑義を呈し，「いつの男と建ぶと，踏み建びて」もしくは「いつの男に建ぶと……」と訓もうとするものである。訓読文自体のなめらかさから見れば，古事記伝の訓みに一歩劣るであろうけれど，訓注のあり方からすれば，近年の訓が合理的であり，そこで提案された各説の中でも，出色のものと称してよかろう。問題は，「と（あるいは，に）」の訓み添えであろうが，ことばの外形に韻律の規制を加えることのない古事記の場合は，万葉の歌とは異なり，さして重要ではあるまい。漢字による日本語表記も韻文と散文では態度に差があってよい。

少し気になるのは，山口氏が「と」を資格・状態をいうものと比喩とに分けて論じたことに対して，一節を割いて論じていることである。「と」に前後して置かれた概念（あ

るいは叙述）が主体的には同一と判断されるから，「と」が表出されるのであろう。それを資格か比喩かとあげつらうことは，解釈の立場に立ったとき，どれほどの一致乃至乖離を感じるか，という問題ではなかろうか。ここで提起された引用構文・継起構文ということも，いわば前文と後文の事態についての同様な問題と考えられる。

膨大な本書の内容に対して，ごく一部分を採り上げたに過ぎず，失礼な言を並べた割には意を尽くしていない。両書は，あくまで誠実に，精緻に問題を追求しており，結果，そこには数多くの新見が展開されている。上代の文学・語学に志す者にとって，一度は熟読して置かねばならぬ書である。

（『萬葉集と上代語』　1999年10月30日発行　ひつじ書房刊　A5判　558ページ　本体価格22,000円）

（『上代語の表現と構文』　2000年4月25日発行　笠間書院刊　A5判　339ページ　本体価格10,000円）

——神戸松蔭女子学院大学教授——

（2001年8月23日　受理）